

性的多様性を認める社会を創るには？  
—性的多様性の視点から—

探究(課外活動) 1班  
2名

## WWL 研究報告書

### 1) 問い

性的多様性を認める社会を創るには ～性的多様性の視点から～

### 2) 研究背景

かつてはマイナスなイメージを持たれていたオタクだが、近年の SNS の普及などによって当たり前の存在になりつつある。オタク文化、ファッションの多様化など、様々な面で多様性が認められてきている現在だが、一方でメディアや授業でよくみられる「性的多様性」に焦点を当ててみると、まだ困っている人が多いということがわかる。「第3の制服」の一つとしてスラックススタイルが選択できるように、女子生徒の制服＝スカートというイメージが薄れてきていたり、「男性化粧品」が店頭にならび躊躇なく手に取る人も多くいたりするように、生活の中で「男女の差」がなくなっている部分もあるが、「LGBTQ+」と聞くと、知らない、抵抗がある、どう対応すればいいかわからないなど、その多様性を認めるという状況には至っていない。日本のジェンダーギャップ指数からもそのことは読み取れる。重要な人権の問題にも関わる「性的多様性」について、多くの人が受け入れ、違いを認め合える社会を創るにはどうすればよいかと考え本研究を行うこととした。

### 3) 仮説

「性」は、他人が決めたり、外見から判断したりするものではなく、その人自身が決めるものであることを意識する。自分の物差しだけで、すべてをはかれない、想像しているイメージだけで他の人に接しないことが、LGBTQ+の人だけではなく、すべての人が生きやすい社会の形成につながる。

オタクに対する認識調査によると、かつてはあまりいい印象がもたれていなかったオタクだが、アイドルグッズの取引数の増加(「ラクマ」2017,2018 年の 15～18 歳の「アイドルグッズ」年間取引数推移より)からオタクに対する印象が好転している可能性がある。一方で、性的多様性が社会ではまだ認められていない。性的多様性について知らないために自分の中で勝手なイメージを作り、偏見(バイアス)をもつようになっているのではないか。

### 4) 研究の目的

- ・LGBTQ+についての情報を広める
- ・LGBTQ+への関心を高める

### 5) 研究の意義

- ・ジェンダーバイアスを持っていないか意識して生活する
- ・性的多様性を認め合う中で、多様性を認め合う世界を構築する

### 6) 研究方法

フィールドワーク(大橋運輸株式会社)、インターネット(SOGI ガイドブック)

### 7) 結果・考察

- ① ダイバーシティ&インクルージョン
- ② 女性、外国人、LGBTQ+の人々を採用する多様な人事制度

## ② 共用トイレの設置、研修の実施、福利厚生に適応対象の拡大 ④LGBTQ+理解の取組

### 〈フィールドワークで学んだこと〉

#### ・私たちはなぜLGBTQ+を身近に感じないのか

メディアの影響が大きい。裁判の様子や奇抜な格好をしている人を特にピックアップして放送することで、余計に非日常感が生まれる。

#### ・どのようにして多様性を認める会社をつくっていったのか。

- ① 知る:実際にLGBTQ+のイベントや支援を行っている団体を訪れ、必要な制度について学んだ。
- ② 制度を作る:社員の理解が追いつくように少しずつ変えていった。
- ③ トライアル&エラー:多様性に富んだ会社をつくる=色々な人が集まる。
- ④ 多種多様な問題が起きる。気づいたごとに直すことを徹底し、長いスパンでよい方向に向けていく。
- ⑤ 情報発信:社内報やミーティング、LINE等を通じて社の考えを継続的に発信。

#### ・取組の推進で大変だったことについて

理解するのに人それぞれ時間がかかること。理解が遅い人は諦めるのではなく消化する時間、猶予を与える。

### 〈学んだこと〉

#### ・大橋運輸は『だれでもトイレ』の設置、配偶者欄ではなくパートナー欄と記載するなどの履歴書の工夫、通称名での勤務が可能、社内研修、当事者以外のイベント参加などの活動を行っている。

この取組を行うことで会社の評判が広まり、県外からの入社希望者が増加した。

#### ・採用面接時には、会社の取組を説明している

多様性を受け入れる姿勢の社員が増加した。様々な人が集まることで、多様な価値観や知恵が生まれた。

このことにより細やかな対応が可能になり、新たな答えが見つかるようになった。

#### ・大橋運輸は『知る』『行動する』『知らせる』ことで、多様性を認める会社をつくっていったことがわかった。

## 8) 結論・展望

### 〈私たちにできること〉

- ① 日常から使う言葉や行動に気をつけること。ジェンダーバイアスのかかった言葉や行動をしないことが大切である。
- ② 知識を取り入れること。意識を変えるには知識が必要である。
- ③ 情報発信を続けること。例えば、文化祭テーマや生徒会ラジオを利用する。
- ④ イベントに参加すること。実際に当事者や支援団体と会うことで、意識が大きく変わる。

### 〈今後の展望〉

#### 『アライ』を増やす(アライ…性的マイノリティー当事者のことを理解し、支援のために行動する人)

アライになると、性的マイノリティー当事者に安心感を与えたり、性的マイノリティー当事者の困難さを伝えたり、誤解の解消や差別の是正に貢献したりすることができるようになる。

アライになるのに明確な基準はないが、性的マイノリティーについて知ることがアライになる一歩だと考える。

アライの数が増えることで、性的マイノリティー当事者だけでなく、どんな人でも生きやすい社会になる。

## 9) フィールドワーク協力者・引用文献・参考文献

大橋運輸株式会社、SOGIガイドブック

## 家庭でのフードロスをなくすには何ができるか

探究(課外活動) 2班  
3名

## WWL 研究報告書

### 1) 問い

家庭でのフードロスをなくすには何ができるか

### 2) 研究背景

現在起きているフードロスのうち、約 45%が家庭からの廃棄物であるにも関わらず、家庭での取組は見えずらく、各家庭での対策が明確になっていない。このような現状を踏まえると家庭におけるフードロスの現状、その要因を明らかにし、その要因を特定する必要があると考えられる。また、世界の人口は増え続けており、食糧を十分に得られない人がいる中でフードロスを減らす取組が必要と考えられる。

### 3) 仮説

家庭での食品の購買活動における消費者心理や家庭における食品の保管・処理の仕方の問題点を明らかにすることができれば、フードロス削減の具体的な解決策につなげることができる。

### 4) 研究の目的

家庭でのフードロス削減のために消費者心理と消費者の購買行動や家庭における食品の保管に関する心理的・物理的要因について明らかにする。

### 5) 研究の意義

フードロス全体の約半数を占める家庭でのロス削減は必要不可欠である。したがって、未だ具体的な取組がされていない家庭での解決案を見つけることができればこの問題を解決に導く大きな一歩となると考えられる。

### 6) 研究方法

#### ① フィールドワーク

行き先: フードバンク愛知

愛知県立愛知総合工科高等学校の生徒とフードバンク愛知を見学した。

#### ② 冷蔵庫の調査

1 週間、3 家庭における冷蔵庫の写真を 1 日 1 回撮影し、冷蔵庫内の食品の増減を調べた。

#### ③ アンケート

食品の購買頻度、食べ残しの量、食品を廃棄する原因などをアンケートによって調査した。

#### ④ 冷蔵庫調査

3 つの調査の結果から新たな仮説(②)を立て、それをもとに、「冷蔵庫内の配置を普段と変え、食品の増減、使い勝手の変化を調べる」という調査を行った。

#### ⑤ 過剰除去の調査

さらに、家庭からの食品ロスの大部分を占める過剰除去について、どのくらいの量が出ているのか、減らすことができるのか、「普段の調理と過剰除去を減らした調理の写真を撮る」という調査を行った。

## 7) 結果・考察

### ① フィールドワークの結果

#### ・ディスカッションで明らかになったこと

都心と郊外で食品の買い方、処理方法に違いがあった。

都心の場合、スーパーやネットスーパーで買い物をする。残った食材はキッチンについているディスプレイで処理することができる。郊外の場合、農家の方や隣人が食品を譲渡してくれるケースがあった。また、コンポストを利用して残った食品を堆肥化するケースがあった。

#### ・フードバンク愛知で明らかになったこと

企業からの印刷ミスなどにより販売ができなくなってしまった食品を寄付してもらいそれを子ども食堂などに届けている。フードバンクで食品が残り、その結果食品ロスに繋がることはない。家庭での食品ロス削減に向けて買わないのではなく、早めに寄付の流れをつくるのが大切である。

### ② 冷蔵庫・廃棄量調査の結果

#### 【冷蔵庫調査】

期間：1週間

方法：毎日冷蔵庫内の写真を撮り続け、食材量の増減を調べる。

結果：【期間】1週間

#### ● 冷蔵庫内の変化

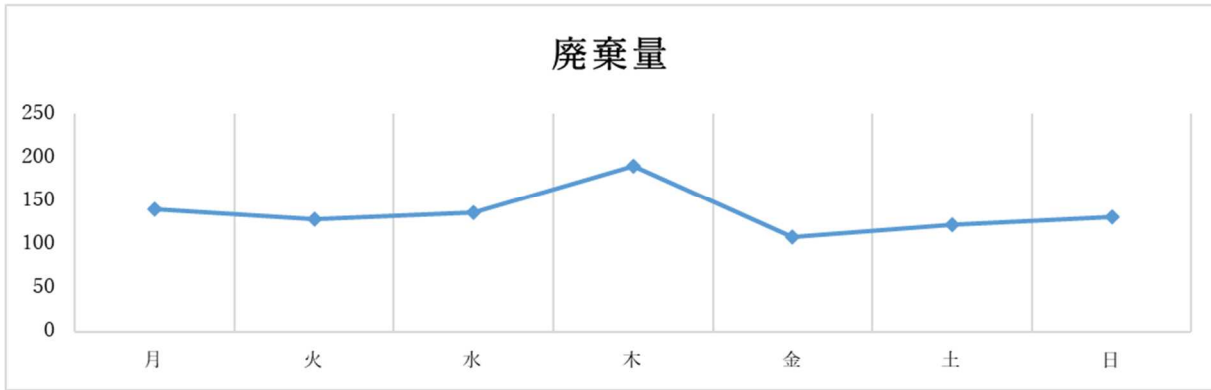
- ・冷凍ご飯の量が増えた
- ・無くなるのがはやい⇒牛乳、卵
- ・無くなるのがおそい(一週間冷蔵庫から消えなかった。)⇒調味料(しょうゆ、ソース、ドレッシングなど)
- ・買い出しに行った日は量が多い

#### ● 変化から見えてきたフードロス

- ・米は余っても冷凍保存できるけど、じゃがいもとかは、冷凍保存が難しいのでフードロスしやすい。⇒冷凍保存できるかできないかは大きな違い！
- ・調味料系は長い期間で使い切ることがほとんど。
- ・やはり野菜や果物など腐りやすく長期保存が難しいものはフードロスに繋がりやすい。
- ・母いわく、冷蔵庫の上の方は目が届きにくいのでフードロスに繋がりやすい。

#### 【廃棄量調査】

	月	火	水	木	金	土	日	合計	平均
廃棄量(g)	140	129	137	191	108	122	131	958	136.8571
内容 (キッチンペーパーを除く)	鶏肉の皮 卵の殻 玉ねぎの皮 ニラの根元 きゅうりのヘタ	魚の骨 卵の殻 かぼちゃの種 梨の皮、種、ヘタ	鶏肉の皮 かぼちゃの種、皮 枝豆の皮 梨の皮	トウモロコシの皮 さつまいもの皮 玉ねぎの皮 茄子のヘタ オクラのヘタ チンゲン菜の根元 ピーマンの種、ヘタ	卵の殻 みかんの皮 オクラのヘタ	みかんの皮 アスパラガスの根元 酢橘の皮 魚の骨、頭	みかんの皮 酢橘の皮 玉ねぎの皮 卵の殻 大根の非過食部分		



#### 廃棄物の例

食パンの耳、鶏ハム→週に2回程の頻度

この結果を受けて立てた仮説

「使う頻度が低い食材は見やすいところへ、使う頻度が高い食材は見にくいところへ移動させれば腐敗や賞味期限切れによるフードロスがなくなるのではないか」

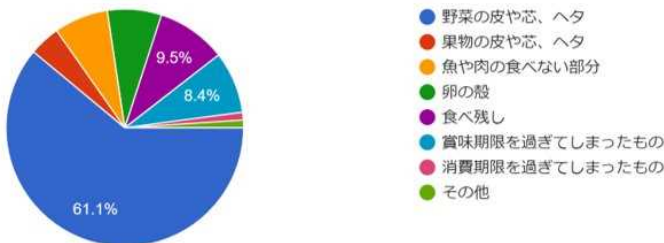
#### ●結果

- ・取り出す際にすごく不便だったため母から怒られた。
- ・たくさん使う食材は手前に置いておきたいと思った。

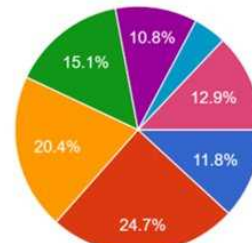
フードロス対策は毎日、継続的に行えることが大切なので利便性が低い対策は続けられないと考えることができる。

#### ③アンケートの結果

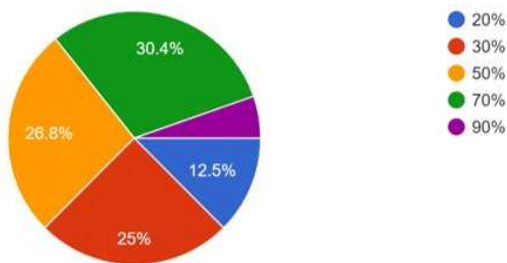
- ・野菜の皮などの過剰除去の占める割合が最も多く、わずかだが食べ残しもあった。



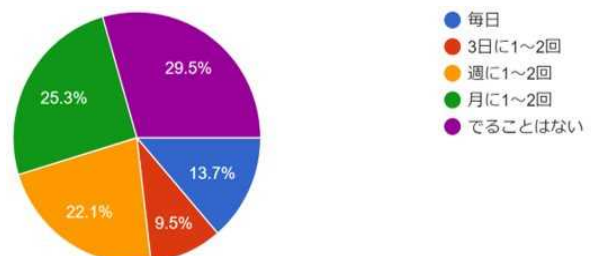
↑一番廃棄量が多いもの



↑二番目に廃棄量が多いもの



↑家庭からの食品ロスは全体の何%を占めると思うかの答え



↑食べ残しが出る頻度

- わかったこと

野菜や果物の皮や芯などが多くを占めていることから過剰除去が多い。  
食べ残しは家庭によって異なるが、毎日食べ残しをするある人は13.7%と少ない。

過剰除去の例

### タマネギ底盤部付近



玉ねぎの場合（調査⑤）（農林水産省,2023）

### 8) 結論・展望

家庭でのフードロスには食べ残しや過剰除去があるが、過剰除去を0にするのは難しいのではないかと思う。食べ残しなど減らすことができる部分を少しずつ減らしていくことが、フードロス削減に繋がるのではないかと考えられる。今後、食べ残しなどを減らすための具体的な取組を考え、実行することでフードロス削減ができる可能性があることが推察される。具体的な取組としては、①自分が便利で、かつ残っている食材がわかりやすい冷蔵庫の配置に変える②コンビニエンスストアなどで行われているフードドライブを利用する③過剰除去の部分を料理に活用する、以上の事が考えられる。また、フードロス自体や過剰除去に関する定義があいまいなことによって考えが異なってしまうこともロスに繋がってしまうのではないか。また、ロス削減の壁となっているのではないか。

### 9) フィールドワーク協力者・引用文献・参考文献

〈フィールドワーク協力者〉

フードバンク愛知

〈参考文献〉

- 1) 農林水産省(2023) 日本の食品ロス状況
- 2) 野々村真希(2018) 家庭の食品ロス発生に大きな影響を与える消費者行動の特定, 廃棄物資源循環学会論文誌, Vol.29
- 3) 野々村真希(2021) 家庭での調理における生鮮野菜の過剰除去行動とそれに関わる意識, 日本食育学会誌第15巻第3号
- 4) 足立清人(2021) 「食品ロスの削減の推進に関する法律」について, 北星学園大経済学部北星論集第61巻第1号



助け合う社会の実現のために必要な「つながり」とは何か

探究(課外活動) 3班  
4名

1) 問い

助け合う社会の実現のために必要な「つながり」とは何か

2) 研究背景

厚生労働省によると 1990 年以降 1 世帯当たりの人数は減り続けている。それに伴って単身世帯の数は増加し、約 20 年後には全世帯の約半数が単身世帯になると推測できる。

また、国土交通省によると、近年孤独死の発生数は増加傾向にある。警察庁によると自殺者数も 2023 年秋までの 10 ヶ月間で 18,000 件以上発生している。

遺体があった場所の掃除を請け負う「特掃隊」の株式会社「リスクベネフィット」によると、孤独死では 64.7% が病死によるものであるという。病死の原因として独り暮らしの高齢者が発作などを起こしても助けを呼べず、そのまま亡くなってしまったり、体調不良を分かっているが一人だと病院に行けない、もしくは諦めてしまったりする場合があるといわれている。

さらに 2020 年 12 月に起きた「ひとり親の母親が 2 人の子供と一緒に大雪の中、心中しようとした事件」のように家庭内暴力や貧困などで苦しんでいても周りに相談できず孤独化し、問題が深刻化する場合がある。また、孤独化した家庭が抱える問題は、それが事件化してから発見されることがある。

3) 仮説

どんな人も周囲に気軽に相談できる相手がいれば誰かが異変に気づいたり、助けを求めたりすることができる。それにより、孤独が問題に至るリスクを減らせる。

また、年代や、立場に関わらず誰もが相談しやすいような相談口を行政などがつくれば、困ったときにすぐに相談できる社会が実現する。

4) 研究の目的

誰もが相談しやすい社会を実現することで、「孤独」によって引き起こされる問題を解決する。

5) 研究の意義

気軽に悩みや話したいことを相談でき、近所に住む人とどのような問題を抱えているのか、どのような状況であるのかを互いに共有しあえる社会を作る。そうすることで、一人で問題を抱えることによる鬱病の発生や孤独死を防ぐことができる。人に話すことで解決することや、周りの力を借りることで解決できることもある。経済活動を伴わず、人々が交流し助け合っていくことは人間社会を維持するうえでとても重要である。

6) 研究方法

私たちの班は二つのフィールドワークを通して研究を進めた。

一つ目の訪問先は、「名古屋市社会福祉協議会(社協)」だ。ここでは、子供から高齢者までの様々な福祉の問題の解決を通して、誰もが安心して暮らすことのできる社会づくりに取り組んでいる。そこ

で、ここでは「助けを求めている人をどのようにして把握するのか」、「町内会の取組などがコロナ禍によって変化したことはあるか」、「相談しやすい環境づくり、相談への対応」などについて伺います。

二つ目の訪問先は、東海地方で活躍しているフードバンク団体、「セカンドハーベスト」である。ここは、食品を企業・個人から回収し、支援を必要としている個人や福祉団体へ提供する活動を行っている。食品を通じて東海地方に支援のネットワークも設置している。ここでは社協で伺った、社協の相談窓口と連携して食品を提供する活動について伺います。

## 7) 結果・考察

「名古屋市社会福祉協議会」では、要支援者だけでなくその周りの家族なども相談できる窓口を設置して、それぞれのストレスや不安の軽減に繋げていることを学んだ。また、同じ境遇にある人の集まりを定期的開催することにより、コミュニティを形成している。その結果、生活に困窮している人が孤独を感じることを減らし、異変にすぐ気づけるようにして問題の深刻化を防いでいることも学んだ。近年では、どんな相談事も一旦聞き、専門の窓口へつなぐ総合的な窓口も設置し、「相談窓口がわからない」などの問題を解決しているようだ。また、各世帯の家族構成を把握できるという社協の強みをいかした、単身世帯への職員による定期的な家庭訪問を行っている。たわいのない会話をすることで、今どのような家庭環境にいるのかを知ることができ、気軽に悩みを相談することができるという取組が行われていることがわかった。ここからは、誰もが相談しやすい環境を作るためには相談窓口の幅を広げ支援者側から積極的に声を上げ、困っている人が相談窓口を見つけやすいようにすることが大切だと考えた。さらに、今困っている人だけでなく、地域のすべての人が福祉についての理解を深め、自分が問題に直面したときに、どこでどのような相談することができるかを知る必要があると思う。

また、「セカンドハーベスト名古屋」では、社協と連携して食品を提供している。そのようにすることで社協への信頼を得ることができ、相談しやすい環境を作っていた。一方で、コロナ禍で要支援者が増加し食品の寄付量が足りていないとも仰っていた。提供できる食品があればこうした団体に寄付していくことも重要であると感じた。

## 8) 結論・展望

今まで私たちは困っている人と支援する人との繋がり、つまり「縦の繋がり」を重視してきたが、フィールドワークを通して、「縦の関係」だけでなく、「横の関係」つまり同じ境遇にある人達の間にも生まれる関係や支援団体同士の繋がりなど、多様な繋がりする方法があることを実感した。

こうしたことから、ただ困っている人だけに手を差し伸べるだけでなく、まずは身近な人との繋がりを深めることで地域のつながりが深まっていき、誰もが相談しやすい社会を実現できるのではないかと結論付けた。

## 9) フィールドワーク協力者・引用文献・参考文献

〈フィールドワーク協力者〉・セカンドハーベスト名古屋(2HN)

〈参考文献〉・名古屋市福祉協議会 厚生労働白書 [1-03.pdf \(mhlw.go.jp\)](https://www.mhlw.go.jp/content/000161177.pdf)

・[孤独死原因を考える！データでわかる孤独死原因と傾向 | 東京・大阪・福岡 - RB \(riskbenefit.co.jp\)](https://riskbenefit.co.jp/)

# 愛知県における河川および海域における全窒素変動とその原因の解明

探究(課外活動) 5班  
3名

1) 問い

愛知県における河川および海域における全窒素変動とその原因の解明

2) 研究背景

生態系の浄化によって維持されている川の清潔さに注目した。愛知県の川の汚染状況と浄化の必要性に焦点を当て、上下水道料金などを通じてその経済的影響を示したい。また、庄内川と植田川を対象に、全窒素量の変動を追跡し、その原因を明らかにする。

〈用語〉・溶存窒素量…水中に溶存して存在する無機態窒素の総量

・庄内川…名古屋市北東部から流れる一級河川

・植田川…名古屋市東部に位置する二級河川 生物多様性センターの近く

3) 研究(1)

名古屋市の河川のうち比較的上流に位置する庄内川と市街地を流れる植田川、さらにその二つが流れ着く伊勢湾の全窒素測定から河川の水質の悪化の原因を見つける。

4) 仮説(1)

山の近くで採取した庄内川、名古屋市北西部に位置する植田川、その 2 つが合流する伊勢湾の順に全窒素量が増えていく。

5) 実験(1)

【手順 1】試料として植田川からペットボトル 1 本分、庄内川から 2 本分の水を採取する。

【手順 2】冷蔵した 2 本のペットボトルの溶存窒素量を測るために、愛知県立総合工科高等学校で全窒素測定を行う。

【手順 3】植田川と庄内川のどちらも流れ着く名古屋港における全窒素量と【手順 2】からわかった 2 つの川の全窒素量を比較し、街が与える河川の影響を考察する。

6) 結果・考察(1)

試験管 A,B(庄内川)よりも C(植田川)に含まれる窒素量のほうが多いことから、植田川のほうが汚れていることがわかる。

7) 研究(2)

街が河川に与える影響の主な原因を突き止める

8) 仮説(2)

ポイント B から D にかけて大きな工場があり、その工場排水が河川的全窒素量に最も大きな影響を与えていると考えられる。

## 9) 実験(2)

庄内川に等間隔で7つの採取ポイントを用意し、どこからどのポイントで全窒素量が最も増えているのかを調べる。全窒素量測定及び採取方法は実験1と同じものを用いる。

## 10) 結論・展望

いくつかの河川では、生態系がもつ自然の浄化作用により、一定程度きれいに保たれている。しかし、都市部の河川においては人が定期的に河川の浄化を行う必要がある。河川を人工的に浄化するコストは非常に大きいため、生態系が適正に保たれ河川が清潔に維持されることは、経済的な観点からも合理的である。そこで今回の調査では、生態系が持つ河川の浄化作用と汚れ具合について、窒素の循環過程に着目し、水中の溶存窒素量を河川の汚れ具合の指標として溶存窒素の分布を調べた。

今回の調査における水中に含まれる溶存窒素の分布から、河川周辺の生態系への負荷が推測できる可能性があると考えている。しかし、河川における溶存窒素の増加の要因を特定するためには、河川周辺の土壌の窒素保持量や雨滴に含まれる窒素量の変化のほか、河川に接続している水路の溶存窒素量など、より詳細に調査する必要がある。溶存窒素量を増加させる要因が特定できれば、環境保護への具体的な取組につながられる可能性がある。

今後は、溶存窒素の調査対象・場所を拡げ、溶存窒素の増加要因を特定し、環境の保全に有効な対策を見つけない。

## 11) フィールドワーク協力者・引用文献・参考文献

### 〈フィールドワーク協力者〉

- ・なごや生物多様性センター
- ・愛知県立愛知総合工科高等学校

### 〈参考文献〉

- ・名古屋市:庄内川水系の河川(暮らしの情報) (city.nagoya.jp)
- ・なごや生物多様性センター|なごや生きものライブラリー - なごや生物多様性センターが運営、管理するなごやの生きもの紹介サイト。(city.nagoya.jp)

## 愛知の海綺麗にし隊

-海洋ゴミを減らすために効果的な解決策は何か-

探究(課外活動) 6班  
1名

## WWL 研究報告書

### 1) タイトル

『愛知の海綺麗にし隊 ～海洋ゴミを減らすために効果的な解決策は何か～』

### 2) 研究背景

OECD、経済協力開発機構によると、環境に流出している世界のプラスチックごみは、毎年、凄まじいペースで増えており、2050年には、海のプラスチックごみの総重量が、世界の海の生物の総重量を超えると考えられている。

日本において、愛知県を含む太平洋側の海洋ゴミの大半は、国内から流れついている。環境省の報告によると、海洋ゴミは、漁業から出るごみや農業や工場のごみが半分を占めるが、残り半分は、家庭から出るゴミが占めており、私たちの生活ゴミが海に流れてそのままになっていることが分かる。この半分に当たる生活ごみを減らすことが愛知の海を綺麗にすることができるのではないかと考えた。

### 3) 研究の目的

私たち高校生にもできる方法で、地域や同年代の人を巻き込み、私たちが住む、愛知の海を綺麗にする。

### 4) 研究の意義

身近な愛知の海を対象に、地域ぐるみでこの問題に取り組むことで、人々の海洋ごみに関する意識を変えたい。

### 5) 仮説

海洋ゴミとポイ捨ての関連性や実態を探るとともに、同世代の高校生にも身近な問題と捉えてもらえるように海岸のゴミ拾い活動を企画し一緒にゴミ拾いを行うことで、海洋ゴミの問題を自分たちに関連のある問題と捉えて、海をきれいにしようとする意識をもつ人が増え、海の環境改善につながる。

### 6) 研究方法

#### 1. 海洋ゴミの実態や原因を探る(フィールドワーク)

##### ① メタウォーター下水道科学館なごや

名古屋の下水道のシステムを見学し、下水道における生活ゴミの除去の精度がどれくらいなのか知る。

##### ② 藤前干潟

海岸に出てゴミ拾いをする。ゴミ汚染の実情やどんなゴミが落ちているかを知る。

##### ③ マルハニチロ株式会社

実際に海洋プラスチックの削減に取り組んでいる企業に訪問し、企業がクリーンアップ活動に取組む意義や、活動の広げ方について学ぶ。

#### 2. クリーン活動の企画

##### ① 藤前干潟、重点区域の内海海岸

愛知県立刈谷高等学校との共同研究で、ゴミ拾い活動をする。



## ② 重点区域の佐久島

プラスチックごみを利用したアート体験を企画し、より参加しやすい活動にする。

チラシ募集や活動内容など SNS を活用し、同世代に海洋ゴミの問題について広く知ってもらう。

## 7) 結果・考察

### 1. 海洋ゴミの実態や原因

#### ① メタウォーター下水道科学館なごや

下水道施設の処理能力は非常に高く、微生物の力を使って目に見えないゴミまで 99.9%除去できるため、下水道から家庭ごみが海に流れているとは考えにくいことが分かった。しかし、大雨などが降ると、下水処理が追い付かず、街でポイ捨てされた雨で流され海に流れついてしまうということもわかった。

#### ② 藤前干潟

ゴミの多さに驚いた。海外から流れてきたゴミもあったが、ポイ捨てによって多くのゴミが捨てられていると感じた。ごみ拾いをしてみると、ポイ捨てをしようという気持ちにはならないと感じた。そこで、ごみ拾いイベントを企画し、多くの方がごみ拾いに参加してもらうことで、ポイ捨てをしようとする気持ちがなくなり、結果としてゴミが減るのではないかと考えた。

#### ③ マルハニチロ株式会社

実際の企業の活動を知り、ごみ拾い活動をしているが、なかなか人が集まらないという課題があると学んだ。そこで、ごみ拾いイベントを企画する上でごみ拾いに何か付加価値をつけることで、より多くの方が参加してくれるようになるのではと考えた。

### 2. 「愛知の海綺麗にし隊」クリーン活動

#### ① 藤前干潟・内海海岸

10月28日に開催された「藤前干潟クリーンアップ大作戦」に参加し、主催者や参加者に話を聞いた。それを踏まえ、高校生主催でクリーンアップのイベントを開催した。ただのゴミ拾いでは人が集まらないという実態から、活動を広めるためには工夫が必要だと感じた。

#### ② 佐久島

佐久島がアートの島ということから、プラスチックごみを利用したハーバリウム体験を企画した。チラシを作成し、SNSを活用して募集や活動を広めた。高校生や大学生、家族参加など10名の参加で、ごみ拾いだけでなく、いい思い出になったという感想をいただいた。「ゴミ拾いに来てよかった」「こんなに大きなゴミがたくさんあるとは驚いた」という感想もあった。

## 8) 今後の展望

参加者アンケートから、実際にゴミを拾うことで人の意識を変える可能性があることがわかった。しかし、ごみ拾いが人のごみ問題に対する意識を変えるのに有効であるかどうかはより多くの対象者が必要である。今後も、このような活動に自分も参加し、周りにも呼びかけていき、この輪を広げていきたい。その輪が大きくなったとき、愛知の海から、地球全体の海の豊かさを守ることに繋がっていくと思う。Instagramでの情報発信も引き続き続けていく。

## 9)フィールドワーク協力者・引用文献・参考文献

〈フィールドワーク協力者〉

・メタウォーター下水道科学館、藤前干潟、マルハニチロ株式会社、愛知県立刈谷高等学校、愛知県立愛知総合工科高等学校、愛知県立愛知商業高等学校

〈参考文献〉

・廣枝淳子「プラスチック汚染とは何か」

・磯辺篤彦「海洋プラスチックごみ問題の真実」

・海岸漂着物推進地域計画重点地区 (<https://www.pref.aichi.jp/press-release/kaigankeikaku-kaitei2023.html>)

・日本財団ジャーナル ([https://www.nippon-foundation.or.jp/journal/2020/44897/ocean\\_pollution/](https://www.nippon-foundation.or.jp/journal/2020/44897/ocean_pollution/))